JHPF ホスピス財団ニュース
Japan Hospice Palliative Care Foundation News
VOL.42 2022/4

（公財）日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団
〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30
TEL.06-6375-7255
FAX.06-6375-7245
E-mail：hospat@gol.com
URL：https://www.hospat.org/

ホスピス・緩和ケアフォーラム2021 in福岡

「死と共存する笑いの世界～落語ではいつも誰かが死んでいる～」

- ◆ 日時：2021年12月４日（土）14：00～15：00
- ◆ WEBライブ配信場所：福岡国際会議場
- ◆ 特別講演：「死と共存する笑いの世界 ～落語ではいつも誰かが死んでいる～」
- ◆ 演者：三遊亭竜楽氏（落語家）
  司会：小杉寿文氏（佐賀県医療センター好生館 緩和ケア科部長）
- ◆ 参加者（WEBライブ配信視聴者）：336名

今回のフォーラムは、第45回日本死の臨床研究会年次大会のプログラムのひとつ『特別講演』として、WEBライブ配信の形で開催されました。

三遊亭竜楽師匠は、カメラワークを利用した演出方法に具体的なアドバイスをくださったうえで、視聴者をしっかりとイメージしながらご講演くださいました。所作も含めた高座での醸し出す空気感は、まさに噺家ならではのもので、聴き手も自然と身を乗り出してお話に引き込まれてしまうほどの力がありました。

今回はコロナ禍でも、オンライン配信の強みを活かして多くの方に大切なメッセージを伝えることができたという良い機会となりました。

大分大学医学部看護学科客員研究員
看護師　寺町 芳子

第45回日本死の臨床研究会年次大会が2021年12月4日、5日に『暮らしの中にある看取りへ』をテーマにWEB開催されました。

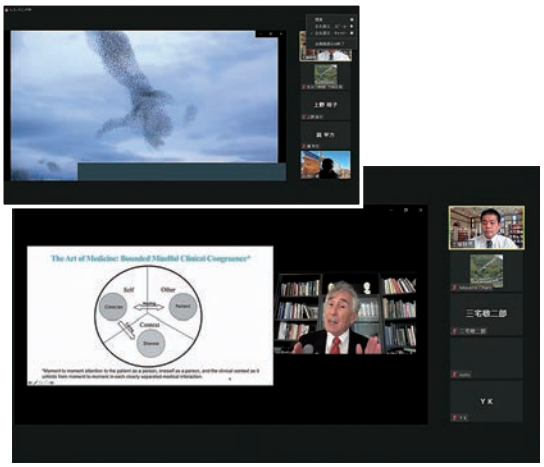
特別講演は三遊亭竜楽師匠による『死と共存する笑いの世界 ～落語ではいつも誰かが死んでいる～』というテーマでした。私が聞いたことがある落語の中にも棺桶の話があったことを思いだし、死を笑いにする江戸の人々の営みって何だろうと思いながらお話をお聞きしました。

竜楽師匠は、【死神】【地獄八景】【死ぬなら今】【片棒】【らくだ】【くやみ】といった演目を話される中で、落語の中の人々の「死」に対する営みは、〔ずっと家にいる〕〔みんなで看取る〕〔家の中で弔いがある〕〔野辺の送りがある〕営みであり、その一部始終が皆で行われていると。また、落語は死についての教訓を伝えていて教育的でもあるとも語られました。笑いの中で死が語られるということは、死にゆく人を看取ることの辛さや悲しさを皆で癒し、死を受け止めていく力を養う人々の英知であり、今で言えば世の中全体での準備教育なのかもしれないと思いました。

延命を価値として果てしなく追求する現代医療は死を避けた医療ではないか。避けることができない死に直面した時、私達の真の幸福を実現する医療には、死を受け止めていく医療に価値があることを落語が語りかけていました。今まで捨ててきた暮らしの中の看取りを現代の英知で取り戻さなければならないと再認識し、力をもらった講演でした。

ホスピス財団　第4回 国際セミナー開催

カナダのMcGill大学のWhole Person Careプログラムで中心的に活動されているHutchinson教授を迎え、「Whole Person Care対話型ワークショップ」がWEB開催されました。



- 実施日：11月27日（土）　13:30～16:30
- 講演１「混沌とした世界における癒しの過程」
  “The Process of Healing in a Chaotic Universe”
- 講演２「Whole Person Careと医療のアート」
  “Whole Person Care and the Art of Medicine”
- 講師：Tom A. Hutchinson氏（McGill大学医学部教授）
- 解説：恒藤暁氏、土屋静馬氏、三宅智子氏

本セミナーは「日本Whole Person Care研究会」ホームページにアーカイブ保存されています。

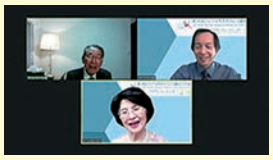
第４回国際セミナー（オンライン）を聴講して

富山大学医学部医師キャリアパス創造センター
消化器内科医　三原 弘

Tom A. Hutchinson教授の、講演1「混沌とした世界における癒しの過程」と講演2「Whole Person Careと医療のアート」を聴講し、土屋静馬先生、三好智子先生の解説後、恒藤暁先生の司会で総合討論が行われました。初期の些細な違いにより長時間後の状態は予測不能であるカオス理論が紹介されました。その時、その時の自己、他者（患者、家族、他職種等）、状況（世界や病状）をあるがままに認識することの重要性を強調されたのだと思いました。患者から病気を分離しCuringは行うものの、患者に対して癒し（Healing）の過程に関わることも医療者としての役割であることを共通認識とすることがWhole Person Careの目標なのだと思いました。Healingとは病気の発生という状況の変化によって患者が考える患者自身の存在意味に生じたそれまでとのズレ（例えば、私は〇の役割を果たしていたが、今は病気になりできない=高潔な一体性の欠如）を患者自ら解消していく過程であると理解しました。このズレの解消にはある程度の時間が必要であることをHutchinson教授は強調されていました。ズレの解消には、安全な環境と関係性のできた調和のとれた態度である聴き手が必要で、姿勢や表情といった非言語的表現が重要であるとのことです。外来医が電子カルテを見ながら無表情にしゃべっても、内容がどんなに正しくとも、癒しの過程は発生しえない、と気づきました。この過程は、一回きりの表現であり、正に芸術（アート）なのだと思いました。医師には、病気という状況に対して治療を行うことと、自己の存在意味に混乱が生じた患者が時間をかけて患者自らズレを解消していく過程を調和のとれた態度（意識的にそこに存在して、自分と相手と状況に向き合っている状態）で支えることの2つの役割があると理解すればよいのだと思います。今後更に、Healingの概念が広がり、全国の医療系学生にWhole Person Careの教育機会が提供され、その指導者が養成されていくことを期待しています。

第14回アジア太平洋ホスピス緩和ケア大会（APHC2021）が神戸でWEB開催されました

★ 日　時：2021年11月12日～14日
★ 場　所：ZoomによるWEB開催
★ 約800名（日本人約600名）



APHCのWEB開催は、初めての経験でした。またほとんどがLIVE配信でしたので、時差もあり苦労もありましたが、大会運営委員の方々のご尽力で有意義に開催することができました。

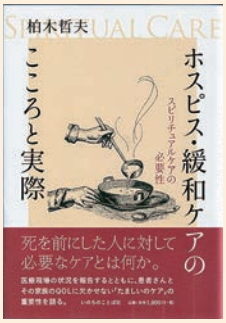
次回、第15回APHCは、2023年韓国ソウルでの開催予定です。

APHNの理事長、Dr.Syinthia Goh先生は本年2月に召天されました。心から哀悼の意を表します。

近刊紹介

ホスピス・緩和ケアのこころと実際
…スピリチュアルケアの必要性

柏木哲夫著
いのちのことば社　1800円＋税　2022年２月刊



本書は、柏木哲夫氏が神戸ルーテル神学校・関西研修センターで学ばれている神学生を対象に、2021年４月～６月に行われた10回の特別講義の講義録である。同校の正木牧人師によると、「伝道師、牧師として末期の方と接するとき、どのようなことに気をつけるべきかを学びたい」という趣旨で行われたものである。神学生への講義ということから、ホスピス・緩和ケア全般に関して分かりやすく記され、一般の方にも十分に理解できる内容となっている。しかし、「ホスピス・緩和ケアのこころと実際」とあるように、ややもすれば疼痛コントロールに偏りがちな、緩和ケアの現場にとって、もっとも大切な、“ホスピス・緩和ケアのこころ”が、しっかりと刻み込まれていることは見逃せない。著者は、終末期のケアで大切なことを“傾聴”と“寄りそい”という言葉で表現され、具体的な事項として10回講義されている。中でもスピリチュアルケアに力点が置かれているのは、講義対象が神学生であることでもあるが、疼痛コントロールの後に来るのは、魂の苦悩に対するスピリチュアルケアが必要であり、その為には、チームとして患者と家族を支える必要を力説されている。最後にユーモアの大切さに触れられているが、末期という精神的に重い話を語られた最後に、川柳を紹介されていることは、著作の心配りではないかと思う。ホスピス・緩和ケア従事者だけでなく、ホスピス・緩和ケアのことを知りたいという方々には絶好の指南書である。

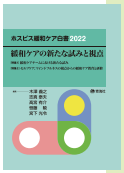
お知らせコーナー

●『Whole Person Care教育編』発売中

『Whole Person Care　実践編』に続き、シリーズ第2弾として出版されました。

▶訳　者：土屋静馬氏
　　三好智子氏
▶監　訳：恒藤 暁氏
▶発行者：三輪書店
▶発　売：ホスピス財団
▶売　価：2000円+税

●ホスピス・緩和ケア白書2022 発売中



発行者：青海社
編集協力：ホスピス財団
3000円+税
（ホスピス財団賛助会員
　　には無償配布中）
特集1：緩和ケアチームにおける
　　新たな試み
特集2：セルフケア、マインドフル
　　ネスの視点からの緩和ケア
　　教育と研修

詳細はホスピス財団ホームページ

こんにちは ホスピス

愛和病院　緩和ケア病棟の紹介

医療法人愛和会 理事長　山田 祐司

愛和病院は1977年7月全国で35番目に緩和ケア病棟を開設しました。2007年11月には病棟を新築し、48床の入院病床はすべて緩和ケア病棟になりました。現在6名の常勤医師、1名の精神科非常勤医師、52名の看護師、3名の薬剤師、2名の非常勤PTがチームを組んでいます。愛和病院はキリスト教精神に基づいて運営されており、常勤のチャプレンがおられます。週に一度のヌーンサービス、ボランティアコーディネーター、遺族会運営などに携わってくださっています。新型コロナ感染症流行前までは、春のお花見、夏祭り、クリスマス礼拝などが行われていましたが、昨年はクリスマス回診のみが行われました。最初は、サンタクロースの恰好などするのは嫌だと言っていた私ですが、患者さんの喜ぶ笑顔を見て、最近では進んでサンタクロースの衣装を身に着け回診をするようになりました。私共の病院は、緩和ケア外来・在宅緩和ケアに力を入れていることも特徴です。私共の病院は、地域での「がん診療ネットワーク」作りにも取り組んでいます。地域での「がん診療ネットワーク」は不幸にしてがんを抱えてしまった方が、どのような状況になっても医療を頼りにできる状況を生み出します。愛和病院は微力ながら、長野地域にお住まいの方々ががんを抱えた時にも、途方に暮れなくてすむような体制の一部となり、地域の方たちのお手伝いができればと考えています。

ホスピス財団 2022年度 事業計画書（概略）

1. ホスピス・緩和ケアに関する調査研究事業（公募）
2. 遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する調査研究事業（第5次調査・2年目）
3. 『ホスピス・緩和ケア白書 2023』（特集テーマの概説+データブック）作成・刊行事業
4. 救急・集中治療における緩和ケアの推進　4年目
5. ホスピス・緩和ケアに関する意識調査（第5回目）
6. ホスピス・緩和ケアボランティア研修セミナー開催事業
7. 『Whole Person Care理論編』発行事業
8. 「ともいき京都」におけるがん体験者・市民主体のプログラム創生事業
9. 緩和ケア・支持療法領域に関わる医療従事者を対象とした意思決定支援に関する研修セミナーの開催
10. 一般広報活動事業
11. 『これからのとき』『旅立ちのとき』冊子増刷
12. International　Congress　on　Palliative Care参加
13. ホスピス財団　第5回 国際セミナー開催事業
14. APHN関連事業
15. 日本・韓国・台湾・香港・シンガポール・インドネシア　第4期共同研究事業（3年計画の1年目）

詳細はホスピス財団ホームページ

初夏の大雪山 旭岳（6月撮影）

2022年度収支予算書（概要）

2022年4月1日から2023年3月31日まで　（単位：千円）

科　　目	2022年度予算
【経常収益】	
①基本財産運用益	5,740
②受取寄付金	17,100
（内訳）　賛助会費収入	16,800
一般寄付金収入	300
③雑収益	1,000
経常収益計（A）	**23,840**
【経常費用】	
①事業運営費	32,700
（内訳）ホスピス・緩和ケアに関する調査・研究事業	12,223
ホスピス・緩和ケア従事者に関する教育事業	11,450
ホスピス・緩和ケアに関する普及・啓発事業	4,860
ホスピス・緩和ケアに関する国際交流事業	4,167
②一般管理費	5,847
経常費用計（B）	**38,547**
当期経常増減額（A－B）	▲14,707

不足分は前期繰越金等で充当予定

寄付者一覧（2021年9月～2022年2月　順不同、敬称略）

（団体）

奈良県伝道会・社会部、遺愛女子中学校・遺愛女子高等学校
日本メノナイトブレザレン教団　石橋キリスト教会

（個人）

アキバサチコ、武田美帆、柏木哲夫、竹下淳也

新規賛助会員（2021年9月～2022年2月　順不同、敬称略）

（団体）

医療法人社団 サンデンタルクリニック
医療法人 慈生会 前原病院

（個人）

櫻井則男、渡辺剛、粕田晴之、宇野喜代子

寄付・賛助会員のお願い

私たちの活動は、全て、皆さまからのご寄付と賛助会員の方々の会費に拠っております。どうか私どもの活動の趣旨をご理解いただき、ご寄付・賛助会員のお申し込みを頂けるようお願いします。

（税額控除の対象になります）

また、「遺贈」による寄付もぜひご一考下さい。当財団は、三井住友信託銀行と「**遺贈による寄付制度**」について提携しております。公益法人への遺贈に拠る寄付財産は、原則として**相続税の非課税財産**となります。

上記ご寄付、賛助会員、遺贈に関するお問い合わせは **06-6375-7255** です。

編集後記

昨年11月に神戸で開催された「第14回APHC」のフィナーレで前理事長であるDr.Cynthia Goh女史が病気療養中にも拘らず熱いメッセージを語られたが、去る2月にその生涯を終えられたこと、心よりご冥福をお祈りしたい。APHCは故・日野原重明先生を中心1996年、アジア太平洋地域でのホスピス・緩和ケアの発展と充実を目指して設立されて以来、参加国も増し加えられ、大きな貢献を今も続けている。Goh女史は、四代目の理事長として、この活動をさらに大きく発展させたことに寄与された方である。ホスピス・緩和ケアの歴史は、シシリー・ソンダース女史が放った一本の矢が、世界へと拡がり、日野原先生へと引き継がれ、さらにGoh女史へと引き継がれたこと、そしてこれからは、彼女が放った矢が次世代へと引き継がれていくことを期待するものである。

矢と歌　　H・W・ロングフェロー

私は大空に矢を放った。矢は私の見知らぬ大地に落ちた
飛び去る矢は余りにも早く、その行方を追うことはできなかった
私は大空に向かって歌を唱った。歌は私の知らぬ大地に消えた
その歌を追うことができるほど敏感で強力な視力を持つ人はいなかった
幾多の歳月が流れ去り、一本の樫の木に、折れずにささっている矢を見つけた
そして、私のあの歌が何も変わらずそのまま、友の心に宿っていたのを知った

（編修子）